

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト
最終成果論文（2019年度）

「読めない」名前はなぜ増えたのか

『四国新聞』「うちの王様」欄の分析

経済学部 4年 学籍番号：21505996

氏名：香川美和

（指導教員：中川真知子先生）

目次

はじめに	3
1. 読めない名前とは何か	7
1.1 研究材料として四国新聞「うちの王様」を用いる理由	8
1.2 「うちの王様」欄における読めない名前の分析	14
1.3 Lieberson『好みの問題』による分析	23
2. 名前における漢字とおとの乖離	28
2.1 閉鎖的体系から開放的体系へ	28
2.2 読めない名前の類型	30
2.3 音は閉鎖的、漢字は開放的	38
2.4 「読めない」名前が増えた変化は不可逆的なものである ..	40
2.5 なぜ読めなくなったのか、その原因について考えられてきた こと	41
3. 「見せる」ための名前	43
3.1 ポジティブな意味だけを切り取られた漢字	43
3.2 視覚優位の情報	47
3.3 「心」が流行る	50

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

おわりに	59
参考資料一覧	62

はじめに

名前とは、誰もが生まれた時に親から与えられるものであり、特別な事情がない限り一生変わらないもの、変えることのできないものである。生まれた子どもは、他の誰でもない一人の人間として他人と区別するために名前を与えられる。人は与えられた名前を毎日のように声に出し、耳にし、紙に書く。自己紹介では、まず初めに名前を述べるし、社会に自分の存在を認識させるのに、名前は不可欠である。名前は、社会においては便宜的に個人を識別する単なる記号としてしか機能しないが、当人にとっては自らのアイデンティティを示す、特別なものである。たとえ同姓同名の他人がいたとしても、当人にとっては唯一の名前であることは変わらない。また名づける親にとっても、命名行為は子どもを授かってまず初めに行うものであり、育児の出発点といえる。名づけは親子の関係において非常に重要な役割を果たすとともに、名づけによって子どもは社会の一員として存在することができる。このように名前には、社会性と唯一性という、相反する二つの側面があるといえる。なお、実際には親以外の者が生まれた子どもを名づける場合もあるだろうが、本研究では子どもを名

づける者のことを親と呼ぶこととする。

名前には時代ごとの流行がある。先行研究¹でも明らかな通り、近年、特に 2000 年以降に自分の子どもに個性的な名前をつける親が増えている。個性的な名前の中には、通常の読み方では読めない名前、普段見慣れないような難しい漢字を用いる名前、外国語の音を漢字にあてた名前など様々な種類がある。そうした名前における大きな特徴は「読めない」ということである。個性的な名前の「読みにくさ」はしばしば物議を醸す²。こうした議論は、単に名前が読めないことによる実生活での不便に対する批判というよりも、読めない名前を我が子に付ける親を批判する側面が強いのではないだろうか。毎年、明治安田生命による男女別「名前ランキング」が公表され、上位にランクインする「読めない」名前が話題となることから、人々の「読

¹ 伊東ひとみ『キラキラネームの大研究』、東京：新潮新書、2015 年、41-47 頁。

² 「子の命名に見る“くらし”の喪失（投書欄）」、『毎日新聞』、2007 年 8 月 20 日、東京朝刊、第 5 面。

「世界で唯一の名：我が子は喜ぶ（投書欄）」、『毎日新聞』、2007 年 10 月 1 日、東京朝刊、第 5 面。

めない」名前に対する関心の高さがうかがえる³。

では、なぜ親たちは、「読めない」名前をつけるようになったのか。人々の名前についての関心は高いものの、自分が読めないと感じた名前を「キラキラネーム」と称し、その異質さを批判するにとどまっておろ、名前にどのような変化が起こっているのかについては、深く考察できていないのではないだろうか。「読めない」名前が増えた背景には、単なる名前の流行とは異なる、大きな変化があるのではないだろうか。本研究の目的は、そもそもなぜ「読めない」名前が増えたのか、その理由の一端を明らかにすることである。私たちの仮説では、「読めない」名前が増えた背景には、名づけにおいて視覚情報という新たなファクターが加わったこと、さらに、本来、表現できると考えられていなかったものを表現し、そこに物語性を付け足すようになったという変化がある。

それを検証するために、『四国新聞』「うちの王様」欄に載っている子どもの名前のデータを用いる。第1章では、そもそも「読めない」名前とはどういった名前を指すのか、その定義について説明し、『四

³『朝日新聞』の朝刊の社会面で、「なまえのはなし」と題して、2020年1月1日から2020年1月9日まで、8回にわたって、名前にまつわる記事が掲載された。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

国新聞』「うちの王様」欄に掲載されている子どもの名前を定量的に分析しつつ、流行という観点から「読めない」名前を分析する。第2章では、第1章で洗い出された「読めない」名前を分類し、質的に分析する。第3章では、親が、名前にこめた物語性を、文字を見ることで即座に理解できるような、名づけの方法になったがゆえに、「読めない」名前が増えたということを説明する。

なお、本研究では、「キラキラネーム」や「DQNネーム」といった名称は用いない。そうした呼び方には、名づけた親の教養のなさ、非常識さを軽蔑する意味合いが込められており、「読めない」名前が増えている事実を、一部の親たちの単純な問題としてとらえるニュアンスがあるからである。

1. 読めない名前とは何か

「はじめに」で述べた通り、人々の名前に対する関心は高く、近年、新聞やテレビで子どもの名前が話題になることがある。そこで取り上げられる名前は、いわゆる「キラキラネーム」や「DQN ネーム」と呼ばれる名前だが、そうした文脈で語られる名前は、「光宙」と書いて「ぴかちゅう」と読む名前や「希星」と書いて「きらら」と読む名前など、おとも読みも既存の名前のストックから外れ、正しく読むことが難しい、非常に突飛な名前である⁴。こうした例は、その奇抜さによる話題性から独り歩きしているようにも見えるが、個性的な名前が、人々の関心を集める理由は、第一に、一見して名前を読むことが難しいという点にあるのではないだろうか。本研究では、この点に注目する。

ところで、本当にこういった名前の子どもの数が増えているのだろうか。また、増えているとしたら、そもそも「読めない」名前とはどのようなものなのか。この問いに答えるために、本章では、読める名前を定義したのち、『四国新聞』「うちの王様」欄に載っている子どもの

⁴ 伊東ひとみ、前掲書、11頁。

名前から、その定義から外れる名前を量的に分析し、1996年から2010年までの変遷をたどる。また、名前の流行にどういった変化が起こっているのかについて、社会学者である Stanley Lieberman の *A Matter of Taste* を参照しながら分析する。

1.1 研究材料として『四国新聞』「うちの王様」を用いる理由

小林康正は、『名づけの世相史—個性的な名前をフィールドワーク—』の中で、読めない名前が増えた背景として、現代の家族は親密な空間に閉じ込められ公共の空間を見ようとしなくなり、その結果、他人に一方的に難解な読み方を強いるようになってしまったこと、消費社会の登場によって差異をつけることで個性を生み出す消費のあり方が人間のあり方にまで及んでいることを挙げている⁵。しかし、本書における「読めない」名前の紹介は、名づけ本を参照するにとどまっており、個性を名前に求めるようになった結果として、なぜ現実

⁵ 小林康正『名づけの世相史—個性的な名前をフィールドワーク—』、東京：風響社、2009年、17-38頁。

に存在しているような「読めない」名前が増えたのかという説明はなされていない。

なぜ「読めない」名前が増えるようになったのか。その理由を知るためには、現実存在する子どもの名前のデータを用いることが不可欠である。そこで本研究では『四国新聞』の「うちの王様」欄の子どものデータを用いることにする。

『四国新聞』は、明治 22 年に創刊された、四国新聞社が発刊する香川県の地域紙である。「うちの王様」欄とは、読者の投稿欄である。掲載日に誕生日を迎える 1 歳から 3 歳までの子どもが毎日平均して十数人掲載されている。図 1 のように、「うちの王様」欄には、投稿された子どもの顔写真、氏名、ふりがな、居住地、両親の名前と続柄、誕生日、両親からのひとことが載っている。

図 1 『四国新聞』「うちの王様」欄に載っている子どもの例⁶



さとう みさき
佐藤 美咲ちゃん

- ①高松市
- ②太郎・花子 次女
- ③2005年1月1日
- ④元気でやさしい女の子に育ってね！

たしかに実在する子どもの名前のデータをとるならば、明治安田生命が毎年発表する名前ランキングでも、現代において多くの親に好まれる名前はわかる。たとえば、明治安田生命の2019年の名前ランキングは、同年9月時点において、男の子8455人、女の子8407人

⁶ 図1は、『四国新聞』「うちの王様」欄に載る子どもの例を著者が作成したものである。なお、実際はイラストではなく、本物の子どもの写真が掲載される。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

を対象として調査を行っており⁷、データ数は非常に多く、大まかな名前の流行を把握するには優れている。2005年頃から、女の子の名前では「陽菜」「心優」「結愛」、男の子の名前では「颯」「大翔」など、読み方が一通りではない漢字を使った名前、初めて見たときに正しく読めない名前が上位10位に入り、増え始めたことがわかる。こうした名前は前後の年にもランキングに入っていることから、流行っていることには間違いないだろう。しかし、明治安田生命のランキングで上位だった名前であっても、すべての名前に対する占有率は高いとは言えず、名前の種類自体が増えていると推測でき、このランキングだけを参考にしても、実態は見えづらいと考えられる。実際に、2004年の女の子の名前ランキング⁸で一位だった名前は「さくら」と「美咲」だったが、「うちの王様」欄のデータでは女の子70人のうち、「さくら」が一人いたにすぎなかった。また同年の男の子の名前ランキングで一位だった名前は「蓮」だったが、同データでは84人

⁷ 明治安田生命「名前ランキング2019 調査要領」、
(<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/result.html> 最終閲覧：2020年2月14日)

⁸ 明治安田生命「名前ランキング2004」
(<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2004/best100/> 最終閲覧：2020年2月14日)

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

の男の子のうち「蓮」は一人もいなかった。明治安田生命は、毎年同社の生命保険に加入した人を対象に名前の調査を行っており、2004年は女の子 4419 人、男の子 4861 人を対象に調査した名前のデータからランキングを取っているが、女の子の中で「さくら」と「美咲」という名前の子どもは 39 人で、全体に占める割合は 0.88%、男の子の中で「蓮」という名前の子どもは 35 人で、全体に占める割合は 0.72%に過ぎなかった。つまり、ランダムに 2004 年生まれの男の子を 100 人選んだとしても、その中に「蓮」という名前の男の子は一人いるかいないかくらいの割合でしか存在しないので、同年の「うちの王様」欄から抽出した 84 人のうち、「蓮」という名前が一人もいなくてもなんら不思議ではないのである。さらに同年のランキングで 1 位から 10 位までの名前の子どもを合わせても 235 人で、全体に占める割合は 4.83%にしか満たなかった。「うちの王様」欄のデータに戻ると、2004 年生まれの男女 154 人の中で同性で重なっている名前は、男の子の名前で「颯」と書いて「はやて」と読む名前だけで、二人いるだけだった。一方で 2004 年に生まれた子どもの親の名前では、父親 154 人のうち「誠」が 4 人、「健二」が 2 人、「直樹」が 2 人、「博之」が 2 人、母親 154 人のうち「優子」が 3 人、「由美子」が 3 人、

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

「祐子」が2人、「景子」が2人、「真弓」が2人、「由佳」が2人、「和代」が2人おり、同性で重なっている名前が複数見られた。親世代の名前は限りある名前のストックから割り当てられて与えられていたのだろうと推測できる。もちろん親の年齢は10代から40代もしくはそれ以上と、幅があるため、子どもの名前と単純に比較することはできないが、やはり明治安田生命の名前ランキング自体があまり参考にならないほど、以前に比べて多種多様な名前の子どもが増えているといえるだろう。そうした事実を踏まえて、実際に子どもにどのような名前が付けられているのかを分析するため、本研究では『四国新聞』の「うちの王様」欄に載っている子どもの名前を分析する。

ウンサーシュッツ・ジャンカーラも、日本人の名づけに関する研究において、個人情報観点から信頼性の高い有効な名前のデータを集めることが難しいという問題点を挙げており、広報誌の出生告知欄を活用することによって解決できるとしている⁹。その点でも、『四国新聞』「うちの王様」欄は有用なデータをとるための適切な資料だといえる。

⁹ ウンサーシュッツ・ジャンカーラ「資料として日本の名づけに関する研究に広報誌を用いる可能性について」、『立正大学心理学研究年報』第9号、2018年、23~33頁。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

明治安田生命の名前ランキングを1912年から2019年まで見ると、2000年以降、顕著に名前の種類が増えていた。そこで、データとして集めたのは、1997年から2012年の毎月1日の『四国新聞』である。1996年から2011年生まれの16年分の子どものデータが、合計で1931人分集まった。紙面の都合により掲載日と誕生日が異なる子どももいるが、より多くのデータを収集するためデータには含むこととする。また、同じ子どもが複数回にわたって掲載されていることがあるが、二回目以降の登場回については数に含めないこととする。

1.2 「うちの王様」欄における読めない名前の分析

ある名前を「読めない」と感じるからには、「読める」名前が存在することになる。そもそも「読める」名前とはどういった名前だろうか。日本語の名前は漢字と読みの組み合わせで成り立つという、他の言語とは大きく異なる特徴がある。たとえば英語の James という名前は、発音記号で言えば[dʒeɪmz]、カタカナ読みで表せば「ジェームズ」と読むほかなく、James と綴りながら「ジョンソン」や「ジャック」と読ませることはできない。しかし、「裕子」と書いて「ゆうこ」「ひろこ」と読める名前があるように、日本語の名前では、一つの漢

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

字に複数の読み方があるものもあり、極端に言えば「裕子」と書いて「まゆみ」と読ませることも不可能ではない。

また正しく読むためには知識を要する名前もある。「郁」と書いて「かおる」と読む名前や、「東子」と書いて「はるこ」と読む名前は、それぞれ人名以外で見かけることのない読み方をしているため、正しく読める人は多くはないと考えられるが、予め知識があれば正しく読めるため、「読めない」名前とは言えないだろう。その反対に、以前は一般的には読めないとされていた名前が、その名前を付ける親が増えることによって読める名前へと変化することがあり、ある世代の人には読める名前が別の世代の人には読めないこともある。また、本来は辞書に規定されていない読み方でも、推測で読める場合もある。したがって、ある名前を様々な世代の男女 100 人に読ませたとき、ほとんどすべての人が読める名前、半分の人が読める名前、誰ひとり親が決めた読み方では読めない名前、それぞれが存在するだろう。ある名前が読めるか否かについて客観的な基準を設けることは簡単ではない。

そこで、本研究では、データの分析において、ある名前が「読める」か「読めない」かを判定するにあたり、二つの基準を用いた。一つ目

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

の基準は戸籍統一文字情報に規定されている読み方で読めるか否かということである。そもそも日本人の名前は、戸籍法という法律によって子どもの名前に使える漢字が決められている。子の名には常用平易な文字を用いなければならないとされており、常用平易な文字とは、法務省令によって定められる常用漢字、人名用漢字、平仮名、片仮名を指す¹⁰。戸籍統一文字情報とは、戸籍のオンライン手続に使用することを目的として整理した文字の情報のことであり、この情報によれば、その漢字が常用漢字や人名用漢字に登録されているかどうかを調べることができ、それぞれの漢字について音読み、常用音読み、訓読み、常用訓読みが登録されている¹¹。法律上は、名前に漢字を使う時は常用漢字または人名用漢字を用いなければならないという規定があるだけで、その漢字をどう読ませるかについては名づける親の自由である。『四国新聞』を分析するにあたり、漢字を用いている子どもの名前について、その読みが戸籍統一文字情報に規定された読みであれば、0.5ポイントを与えることにする。この基準を、

¹⁰ 戸籍法第 50 条、戸籍法施行規則第 60 条

¹¹ 法務省「戸籍統一文字情報」

(<http://kosekimoji.moj.go.jp/kosekimojidb/mjko/PeopleTop> 最終閲覧：2020 年 2 月 14 日)

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

辞書読み基準と呼ぶことにする。また「さくら」や「こころ」といったひらがなだけの漢字を使わない名前も、読み方は一つしかないので、辞書読み基準で読めるものとした。

二つ目は慣習的に読めるか否かである。昭和の時代に最も流行した女性の名前の一つに「和子」と書いて「かずこ」と読む名前があるが、戸籍統一文字情報によると「和」という漢字には、音読みとして「ワ」「オ」「カ」が、訓読みとして「やわらぐ」「やわらげる」「なごむ」「なごやか」「あえる」が登録されるのみであるため、「かず」は読めない読み方であるということになってしまう。「和子」と書いて「かずこ」と読む読み方は非常に一般的であり、世間に受け入れられている読み方であるといえる。歴史上の人物でも、皇女和宮の名前は、「和」を「かず」と読ませており、慣習的な読み方といえる。辞書読み基準で読めるか読めないかにかかわらず、この名前のように慣習的に読める名前には、0.5ポイントを与えることにする。この基準を、慣習読み基準と呼ぶことにする。「うちの王様」欄に実際にあった名前から例を挙げると、「海」と書いて「み」と読む読み方、「音」と書いて「のん」と読む読み方、「洋」と書いて「ひろ」と読む読み方、「人」と書いて「と」と読む読み方などは、辞書読み基準では読めな

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

いものの、慣習読み基準では読める読み方であるとみなされる。また、「優芽」と書いて「ゆめ」と読む読み方は、「優」の音読みは「ユウ」「ウ」「オウ」だけであるため、辞書読みでは正しく読めないものの、おとが名前の限定的なストックの中に含まれており、「ゆうめ」ではなく「ゆめ」と読むのだろうと推測できるため、慣習的には読めるとみなす。「玲美」と書いて「れみ」と読む名前、「凜々子」と書いて「りりこ」と読む名前も同様である。

さらに「大和」と書いて「やまと」と読む読み方、「日向」と書いて「ひなた」と読む読み方、「日和」と書いて「ひより」と読む読み方などは、普通名詞としてその特殊な読み方が広く知られており、もともと単語として成り立っているため、例外的に辞書読み基準でも読めるとし、慣習読み基準でも読める名前と判断した。

一方で、「実花」と書いて「みはな」と読む名前は、辞書読み基準では読めるものの、「みか」という読み方が、おとのストックにあるため一般的であり、慣習では正しく読めず間違った読み方を導くため、慣習読み基準では読めないものとする。「大樹」と書いて「たいじゅ」と読む読み方も、名前として一般的な読みは「だいき」、「ひろき」であり、「明」と書いて「めい」と読む読み方も一般的な読みは

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

「あきら」であるため、表記が一般的である一方でおとが珍しい、こうした名前も同様である。また、「捷翔」と書いて「はやと」と読む名前や、「煌人」と書いて「きらと」と読む名前は、そもそも「捷」「煌」といった漢字そのものが珍しく、辞書読み基準ではそれぞれ「はい」「きらめく」と読めるものの、そうした読み方も浸透していないため、慣習的には読めないとする。

慣習的に読めるかどうかという基準は主観を含むものであり、時代とともに変化するものであるため、慣習的に読めるか読めないかの判断は簡単ではない。たとえば「翔ぶ」を「とぶ」と読むことから、「一翔」と書いて「かずと」と読む名前や「悠翔」と書いて「ゆうと」と読む名前などは最近になって一般的になってきたものの、名前で「翔」という漢字が使われていたら「しょう」と読んでしまうため、「と」とは読めない人も多いと考えられる。この読み方は、現在では男の子の名前ランキングの上位にも多い名前であるため、読める人も増えており慣習的に読めると本研究では判断したが、時代とともに慣習が変化し、「読めない」名前が「読める」名前に変化した一例であるといえる。

ただし、読めない名前の中では「姫由」と書いて「ひより」と読む

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

名前や「夢叶」と書いて「ゆうと」と読む名前など議論の余地なく読めない名前が多いため、読めるか読めないかを個別に判断しなければならない名前はそれほど多くはなく、一つ一つ慎重に判断すればそれほど大きな問題はないといえる。

以上の二つの基準により、「うちの王様」欄に掲載されている名前にポイントを与え、「読める」度合いを測り、生まれた年ごとに平均値を出した。このポイントの平均値が高ければ高いほど、「読める」名前の子どもの多いことを意味する。

また、「読める・読めない」の基準とは別に「和泉方式」というダミー変数を用いることとする。データを分析したところ、「和泉」と書いて「いずみ」と読むように、漢字の一文字以上を全く読ませない読み方をする名前が多いことを発見した。大阪府にある地名として知られる「和泉」という言葉は、本来であれば「泉」の一文字で「いずみ」と読めるのに、縁起がいいなどの理由であえて黙字として「和」という漢字を付けたし、「和泉」の二文字で「いずみ」と読ませている。また「風邪」という言葉は、「風」の一文字で「かぜ」と読めるが、空気の流れを意味する「風」と気道の炎症を意味する「風邪」を区別するために、「邪」の一文字を付け足している。両者とも辞書通

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

りの読み方では正しく読めないものの、その特殊な読み方が広く知られているため、「いずみ」「かぜ」と読むことが出来る。そういった型を子どもの名前にも当てはめて新たに漢字と読みの組み合わせを作り出した名前のことを、本研究では新たに「和泉方式」と名づけることとする。和泉方式の名前には、「舞」だけで「まい」と読めるのに、そこに「生」という字を加え「舞生」と書いて「まい」と読ませる名前や、「拓」だけで「たく」と読めるのに、そこに「久」という字を加え「拓久」と書いて「たく」と読ませる名前などがある。こうした名前は、「和泉」や「風邪」といった言葉と違って、親が新たに作り出した名前であり、他者と共有された言葉ではないため、ほとんどの人が初見では正しく読むことができないと考えられる。

表1は、生まれた年（西暦）、「うちの王様」欄に掲載されていた子どもの人数、その年に生まれた子どもの名前の「読める」度の平均、和泉方式の名前の子どもの数をまとめたものである。表を見ると、子どもの名前の「読める」度が明確に小さくなっており、「読めない」名前の子どもの数が増えたということがわかる。また、「読めない」名前の一種である「和泉方式」の名前が増えている。「読めない」名前が流行しているといえるが、そもそも名前の流行とは、どのようなもの

なのだろうか。

表 1 「読める」度と「和泉方式」¹²

掲載年（西暦）	掲載人数（人）	読める度（%）	和泉方式（人）
1996	107	0.8785	0
1997	108	0.8796	1
1998	93	0.9086	0
1999	108	0.912	1
2000	105	0.8761	0
2001	138	0.8297	2
2002	136	0.8308	3
2003	127	0.7598	3
2004	154	0.7564	6
2005	137	0.7848	1
2006	142	0.7922	3
2007	137	0.7226	9
2008	166	0.7078	3
2009	135	0.7481	4
2010	122	0.7049	1

¹² 表 1 は、1996 年～2010 年の各月 1 日の『四国新聞』の朝刊に掲載された「うちの王様」欄に載っている子どもの名前をもとに、著者が作成したものである。

1.3 Lieberman 『好みの問題』による分析

名前の流行について知るために、大規模な人名の研究を行っている Stanley Lieberman の研究を参考にする。Lieberman は、人種や宗教、言語を研究対象とするアメリカの社会学者である。そもそも名前とは個人の好みの問題である。彼の関心は、人々の好みや流行がどのように働き、それが文化の移り変わり方を理解するのにどのように役立つのかということについて個人の名前を通して研究することにあつた。名前は、以下に挙げる三つの特徴により好みや流行の変化をとらえるのに向いていた。一つ目は、長期間にわたる厳密な分析に耐えることができ、国を越えた考察を可能にするほどの十分な出生に基づくデータがあること、二つ目は、他の主な流行を生み出している商業的な力に左右されないこと、三つ目は、多くの好みは経済的な要因に影響されるが、名前はすべての親が子どもに与えるものであることである。これにより商業的な影響や経済的な影響による外的要因を排除した、好みの純粋なメカニズムの分析が可能となるのである¹³。

¹³ Stanley Lieberman, *A Matter of Taste: How Names, Fashions and Culture Change* (Yale University Press, 2000), pp. 23-26.

Lieberson は、名前の好み(taste)の流行(fashion)は内的メカニズムによるものであると述べている¹⁴。Lieberson はその内的メカニズムを、「歯車効果」「置換システム」「好みの系統」「突然変異」「象徴によりある名前が傷つけられること」「象徴によりある名前の人気が高まること」の七つに分類する¹⁵。歯車効果とは、既存の好みの要素が新しい好みに影響し、新たな流行を生み出すというものである。最近の女の子の名前は、2文字のおとの名前が流行しているが、これは歯車効果によるものであり、3文字の名前が流行った後は2文字の名前が流行るといのように交互に流行が来ている。歯車効果があることによって、外部的な社会の要因がなくても、現在の好みの流行が新たな好みを決定づけるのである¹⁶。また内的メカニズムは新しい好みを決定付ける上で重要な役割を果たすものである。歯車効果は量的変化を伴うが、ほとんどの流行は量的、質的要素の両方から成る。質に関わる流行を生み出す装置のうち、「置換システム」とは、新たな好み、既存の好みの要素を徐々に置き換えることによって生まれる、

¹⁴ 同書、p. 14.

¹⁵ 同書、p. 112.

¹⁶ 同書、p. 92.

というものである¹⁷。最後にはまるっきり変わってしまうような変化でも、既存の要素が徐々に変わっていき、それを繰り返すことで起こるのである。「好みの系統」は、ある既存の名前を軸として新たな名前が作り出されるということである¹⁸。たとえば Janet, Jaime という名前は Jane という名前を軸に派生して誕生した名前である。日本では、近年、「ゆい」「ゆあ」「ゆづき」という名前が流行しており、これも「ゆ」という文字の好みから派生したものであるといえる。

「突然変異」とは、新たな好みが生まれることを、生物の遺伝的な突然変異に例えて表したものである¹⁹。遺伝における突然変異の流れは続くものだが、その殆ど全てが生きていくのに必要ではないので広まらない。しかし、まれに突然変異が社会の状況下で有利なときは、生き残って拡散することがある。人間の名前についても法的なルールや公的なルールがない世界なので、新たに生まれる名前（突然変異）を見ることができる。遺伝の突然変異と同様に名づけにおいても、親が新しく作り出した名前を魅力的と感じる可能性が高まる状況がある。突然変異によって生まれた名前のほとんどは消えてなくなるが、

¹⁷ 同書、pp. 114-117.

¹⁸ 同書、pp. 117-122.

¹⁹ 同書、pp. 122-126.

いくつかはある程度の人気を獲得するのである。

「象徴によりある名前が傷つけられること」「象徴によりある名前の人気が高まること」とは、ある象徴的なイメージによって、その名前が人々にとって魅力的に見えたり、そうではなく見えたりすることである²⁰。好みにはたいてい象徴的な要素が存在する。裕福さを表す好みであったり、難解な知識を表す好みであったり、社会的態度を表す好みであったりと、その要素は比較的はっきりしている。その象徴があることで、名前が魅力的に見えることもあるし、そうでなくなることもある。またその象徴さが持つイメージは時の変化により変わることもある。また好みによる連想は個人だけでなく階級や人々、活動とリンクして高められる。

この Lieberson の研究を、本研究において日本人の子どもの名前の流行を考えるうえで応用できる²¹。2000 年以降に生まれた子どもの名前が読めなくなっている現象は、Lieberson の示す突然変異にあたるといえるだろう。以前に共有されていた、名前は読めるものでなけれ

²⁰ 同書、pp. 126-142.

²¹ Lieberson の研究が、日本人の名前にも応用できるということについて、久山は以下の論文で論じている。久山健太「Lieberson の個人名研究と日本における発展可能性」、『年報人間科学』、2013 年、第 33 号、1-14 頁。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

ばならないという価値観が崩れ、「読めない」名前が自由に創作され始めた。また、歴史上の偉人でも知らなければ読めない名前を持つ人はいたが、それが大衆化している現状は突然変異といえるだろう。

個性的な名前が増えてきたことは周知の事実だが、では具体的にどのような名前が増えてきたのか、「読めない」名前とはどういった名前なのだろうか。

先ほどの表 1 でもわかる通り、2000 年を境に徐々に「読める」度が小さくなっていき、2000 年以前は 9 割の子どもの名前が読めていたのに対し、2008 年頃には読める名前の子どもの割合は 7 割程度まで下がっている。また 2000 年以前はほとんど存在していなかった和泉方式の名前が、2000 年以降に増え始め、2008 年には 9 人もの子どもの名前が和泉方式であった。名前全体に対する割合としては小さいものの、和泉方式の名前が増えつつあるといえるだろう。しかし、「読めない」名前は、すべてが「和泉方式」によるものであるというわけではない。そこで、次章では、「読めない」名前を、質的に分析していく。

2. 名前における漢字とおとの乖離

第1章では、「流行」を引き起こす内的メカニズムのひとつ、突然変異によって「読めない」名前が増えたということ、『四国新聞』「うちの王様」のデータによって、量的に明らかにした。この突然変異の背景には何があるのだろうか。本章では、名前のデータを質的に分析する。個性的な名前をつけるとは、他者の名前との差別化を図るということだが、具体的には、名前のおとは閉鎖的体系をとったまま、漢字の選択や組み合わせを特殊にするという名づけの方法によって、名前が読めないものになったということ、本章では明らかにする。

2.1 閉鎖的体系から開放的体系へ

名づけの体系には「閉鎖的体系」と「開放的体系」の二つがある。

「閉鎖的体系」とは、名前の種類と数が限定されていて、一定の名前のストックの中から、子どもの出産状況や社会的地位に名前が割り当てられるような社会の体系であり、「開放的体系」とは名前の種類も数も極めて多く、次々に個人名が創作される社会の体系である。小

林大祐は、日本語の名前は表意文字と表音文字との併用という構造的な特性のために「開放的体系」をとる潜在的な可能性を孕んでいるものの、名前における変化とは、その選択制限する機会によってのみ決定されるわけではなく、むしろ欲求の側面によって顕在化するということを述べている²²。つまり、常用漢字ならびに人名用漢字が新たに追加され、名前に使える漢字が増加したことによって、名前の選択の幅が広まっているわけではなく、音や響きは、既存のストックを利用して語感を変えずに、漢字の選び方によって、他の名前と差異化したいという欲求こそが、選択の幅を広くしたというのが、小林の主張である。

意識しているか否かにかかわらず、少なからぬ数の親が子どもに個性的な名前を付けようとする傾向にあることは先行研究からも明らかである。子どもに平凡な名前、ありふれた名前をつけようとするれば既存の名前のストックの中から選ぶはずである。個性的な名前とは、つまり他人と同じにならない名前のことである。日本語の名前はほとんどが漢字による表記と読みの組み合わせで出来ているため、

²² 小林大祐「名前の社会学的分析に向けて 漢字がつくる同一性のなかの差異」、『評論・社会科学』第65号、2001年、23-41頁。

他人の名前との差異を追求しようとするれば、珍しい漢字や名前に使われることが少ない漢字を用いるか、珍しい読み方をさせるか、漢字や読み自体は平凡なものその組み合わせを独自のものにするといった方法が考えられる。

それでは、『四国新聞』「うちの王様」欄で収集した「読めない」名前は、どのような方法で差別化されているのだろうか。

2.2 読めない名前の類型

まず『四国新聞』「うちの王様」欄に載っている子どもの名前のうち、「読める」度が0の名前、すなわち辞書読みでも慣習読みでも読めない名前について、「和泉方式」のほかに、6つの型に分類し、分析していく。表2は、読めない名前の類型とその例である。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

表 2 読めない名前の類型とその例²³

読み方の類型	名前の例
漢字が本来持つ読み方の一部のみを切り取って、読ませる読み方	然音（ねお） 愛友（あゆ）
漢字を名のりと呼ばれる特殊な読み方で読ませる読み方	心美（みみ） 一志（かずゆき）
本来ある読みにおとを一文字付け加えて読ませる読み方	苗（さなえ） 活（いくる）
名前に使われる漢字を、部首以外の部分の読み方で読ませる読み方	慎子（まこ） 由捺（ゆな）
その漢字の持つイメージから連想させて読ませる読み方	英雄人（ひろと） 月渚（るな）
その漢字の読み方にはない読み方で読ませる読み方	煌志仁（あとい） 三子（みやま）

一つ目は、漢字が本来持つ読み方の一部のみを切り取って、読ませる読み方である。読めない名前のうち、約半分はこの型に当てはまる。

「然音」と書いて「ねお」と読む名前は、「然」の読みである「ねん」から「ね」だけを、「音」の読みである「おと」「おん」から「お」だけを切り取って「ねお」と読ませている。そもそも「然」という字を人名に用いること自体が珍しいうえ、両方の字の読みを一部だけ切

²³ 表 2 は、1996 年～2010 年の各月 1 日の『四国新聞』の朝刊に掲載された「うちの王様」欄に載っている子どもの名前をもとに、著者が作成したものである。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

り取っており、さらに「ねお」というおとも「新しい」を意味するギリシャ語の”neo”を連想させ、日本人の名前としては馴染みのないものであり、こうした複数の要因が合わさって、この名前を読めないものになっている。また「愛友」と書いて「あゆ」と読む名前は、「愛」の読みである「あい」から「あ」だけを、「友」の読みである「ゆう」から「ゆ」だけを切り取って「あゆ」と読ませている。この名前も先の名前と同じく両方の字の読みを一部だけ切り取っている。おとに関して、「あゆみ」というおとは一般的であるのに対し、「あゆ」は珍しいため、簡単に誰もが読める名前というわけではない。一方でこうした型の名前であっても、「優月」と書いて「ゆづき」と読む名前は、「ゆう」から「ゆ」だけを切り取って読ませているものの、おそらく「ゆうづき」ではなく「ゆづき」と読むのだろうと、おとから推測できるため、「ゆづき」と読むことができる。「優」という漢字が人名に用いられる時の読み方は「ユウ」「すぐる」「まさる」に、「月」という漢字では「つき」に限られることや、「ユヅキ」というおとが一般的であることが、総合的にこの名前を「ゆづき」と読ませているのだ。

二つ目は、漢字を名のりと呼ばれる特殊な読み方で読ませる方法

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

である。名のりとは、人名に漢字を用いるときに使われる、音読み・訓読み以外の読み方のことである。たとえば、「心」という漢字には、「こころ」「シン」という読み方のほかに、名のりとして「きよ」「ここ」「ご」「さね」「なか」「まな」「み」「むね」「もと」といった読み方が存在する。「心美」と書いて「みみ」と読む名前や「ここみ」と読む名前は、名のりを使っているといえる。また「志」という漢字には、「こころざし」「こころざす」「しるし」「しるす」「さかん」「シ」という読み方のほかに、名のりとして「さね」「むね」「もと」「ゆき」といった読み方が存在し、「一」という漢字には、「ひと」「ひとつ」「イチ」「イツ」という読み方のほかに、「おさむ」「かず」「はじめ」「まこと」などの読み方が存在する。「一志」と書いて「かずゆき」と読む名前は、名のりを使っているといえる。名のりは一つの漢字に無限にあるわけではないが、常用漢字や人名用漢字一つ一つについて名のりをすべて覚えている人は多くないため、有名な名のりであれば、すぐに読めない名前になってしまう。先述した「和子」と書いて「かずこ」と読む名前も確かに名のりを用いているが、昭和の時代に非常に人気があり、この名前がついた芸能人も多くいたため、ほとんど誰もが読める名前として認識されている。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

こうした型の名前が流行り始めた当初は読めない人もいたかもしれないが、同様の名前が増えることで「読める」名前として世間に広まっていくのである。2000年以降では、「莉彩」と書いて「りさ」と読む名前、「彩恵」と書いて「さえ」と読む名前、「彩稀」と書いて「さき」と読む名前など「あや」という漢字を名のりである「さ」と読ませて用いる名前が増えている。本研究では、辞書読み基準でも慣習読み基準でも読めない名前として判断したが、時が経ち彼らが社会に出る頃になれば、おそらくそうした名前は一般的に「読める」名前として認識されるようになっていだろう。同様に「陽」という漢字を「はる」と読ませて用いている名前や「望」という漢字を「み」と読ませて用いている名前も、今は世間的にはそれほど一般的ではないが、「うちの王様」欄ではしばしば見られる読み方であり、「陽斗」と書いて「はると」と読む名前や「陽翔」と書いて「はると」と読む名前、「望来」と書いて「みく」と読む名前、「望莉」と書いて「みり」と読む名前が存在する。これらの読み方で読ませる名前の流行が続けば、一般的な読み方として広く認識されるようになるだろう。

三つ目は、本来ある読みにおとを一文字付け加えて読ませる読みである。「苗」と書いて「さなえ」と読む名前は、「苗」という漢字の

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

訓読みである「なえ」に「さ」というおとを付け足して「さなえ」と読ませている。また、「雅」と書いて「まさや」と読む名前は、「雅」という漢字の訓読みである「まさ」に「や」というおとを付け足して「まさや」と読ませている。「悠」と書いて「はると」と読む名前や「活」と書いて「いくる」と読む名前も同様である。これはあくまで例に過ぎないが、「さなえ」という読み方をする名前を付けたければ「早苗」という組み合わせの漢字を用いたり、「まさや」という読み方をする名前を付けたければ「雅也」という組み合わせの漢字を用いたりすれば、正しく読まれる可能性は格段に上がるだろう。しかし、あえてそうはせずにやや強引であっても特殊な読み方をさせていることに鑑みると、名づけた親には漢字一文字の名前を付けたいという強いこだわりがあったのかもしれない。

四つ目は、名前に使われる漢字を、部首以外の部分の読み方で読ませる名前である。「榎子」と書いて「まこ」と読む名前は、「榎」という漢字の旁（つくり）である「真」という漢字の読みである「ま」をとって「まこ」と読ませている。また、「由捺」と書いて「ゆな」と読む名前は、「捺」という漢字の旁である「奈」という漢字の読みで

ある「な」をとって「ゆな」と読ませている²⁴。元の漢字である「真」「奈」のほうが名前に使われる漢字としては一般的であるうえ、「槓」「捺」という漢字を使った結果正しく読めなくなっていることに鑑みると、これはあくまで一つの説にすぎないが、字画による姓名判断の結果を優先し、画数を変えつつ、元の字に近い漢字を用いたのかもしれない。しかし、部首以外の部分が読み方を決めることが多いという漢字の性質上、特に後者の名前は、読む者が、「ゆなつ」ではなく「ゆな」と読むのだろうと推測できるため、正しく読める人も一定数いると考えられる。

五つ目は、その漢字の持つイメージから連想させて読ませる名前である。「英雄人」と書いて「ひろと」と読む名前は、英雄を意味する英単語である"hero"をカタカナの「ヒーロー」に直し「ひろと」と読ませていると考えられる。また、「月渚」と書いて「るな」と読む名前は、天体の月を意味するラテン語の"luna"をカタカナの「ルーナ」に直し「るな」と読ませていると考えられる。「ひろと」や「るな」というおと自体は珍しくはないものの、漢字という日本語に固有の

²⁴ 「ゆな」というおとの名前は、かつては「湯女」を連想させたが、時代とともにその言葉は忘れられ、女の子の名前として広く受け入れられるようになった。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

文字に対して外国語のおとをあてるというねじれが起こっているため、「読めない」名前になってしまっているといえる。これまでも、「杏奈」と書いて「あんな」と読む名前や「樹里」と書いて「じゅり」と読む名前、「恵麻」と書いて「えま」と読む名前など、特に女子の名前で、だれでも読めるような漢字とかなの組み合わせを用いて欧米人のような名前を付けることはあったが、漢字自体の意味から読みを連想させる、ある意味ではクイズのようにも感じられる読ませ方は 2000 年以降に目立つようになったといえる。いわゆるキラキラネームや DQN ネームの文脈で語られることの多い名前ともいえる。

六つ目は、その漢字の読み方にはない読み方で読む名前である。

「煌志仁」と書いて「あとい」と読む名前は、漢字と読みが全くあっていない。「煌」を「あ」、「志」を「と」、「仁」を「い」と読むのだと仮定して、それぞれの漢字にそれぞれの読み方は存在しない。「三子」と書いて「みやま」と読む名前も同様である。本稿で列挙してきた読めない名前の類型の中で最も読むうえでの難易度が高く、正しく読める人はほぼいないだろうと考えられる。

2.3 音は閉鎖的、漢字は開放的

「読める」度が0の名前を分析すると、「あとい」「るう」「みやま」など音自体が珍しい名前も見られたが、ほとんどは既存の音でありそれほど目新しさは感じられない。音自体は珍しくないものの、漢字との対応から「読める」度が0となってしまう名前がほとんどである。Liebersonの提唱する歯車メカニズムに沿って考えてみると、新たに好まれて流行る名前は、既存の好みの要素を取り入れつつ生み出されるものであるため、「うちの王様」欄の名前でみると、音は既存のストックから選びつつ、漢字については一般的には名前に使われない漢字を用いたり、特殊な組み合わせ方をしたりしているといえる。

昭和時代には、「和子」「節子」「陽子」など名前の最後に「子」がつく女性の名前が非常に流行した²⁵。「うちの王様」欄に載っている女の子の名前でも、「愛子」「実沙子」「瑤子」など「子」で終わる名前

²⁵ 明治安田生命「名前ランキング 生まれ年別ベスト10」

(https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/index.html)

最終閲覧：2020年2月14日)

角田文衛『日本の女性名：歴史的展望』、東京：国書刊行会、2006年、471-484頁。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

が見られたが、「柚心」と書いて「ゆこ」と読む名前や「清湖」と書いて「さやこ」と読む名前、「莉香」と書いて「りこ」と読む名前や「亜古」と書いて「あこ」と読む名前なども存在し、おと自体は「〇〇こ」であり、「こ」で終わるという点ではかつてと変わっていないが、どういう漢字を使って「こ」と読ませるかという点において選択の幅が広がっている。特に「心」や「香」という漢字は、辞書読み基準でも慣習読み基準でも「こ」とは読めない。「こ」で終わる女子名には一般的には「子」という漢字を使うという慣習があるにもかかわらず、あえて他の漢字を使うことで個性を発揮している。また、「こころ」、「ゆず」、「なぎさ」、「かなめ」、「こはく」など普通名詞のおとを固有名詞である子どもの名前につけている名前もあるが、普通名詞としての漢字である「心」、「柚子」、「渚」、「要」、「琥珀」という漢字はあてずに、そのままひらがなを用いるわけでもなく、「湖々路」、「由珠」、「凧沙」、「叶夢」、「虎珀」と独自の漢字をあてている。普通名詞ではなく固有名詞であることを区別してわからせるためという意図もあるのかもしれないが、やはり既存の日本語に存在するおとで読ませながら、漢字に関しては新たな組み合わせを創作していることから、おとは閉鎖的体系をとっているものの、漢字は開放的体系

をとっているといえる。そしてその現象が顕著に現れている名前の体系が1章で述べた「和泉方式」の名前である。

2.4 「読めない」名前が増えた変化は不可逆的なものである

明治安田生命の生まれ年別名前ランキングを見ていると、名前の好みの流行に先述した Lieberson の言う歯車効果が働いていることがわかる。前述した通り、男の子の名前では、大正後期から昭和中期までは「清」「勇」「誠」といった漢字一文字の名前が流行り、その後平成初期までは「大輔」「達也」「健太」といった漢字一文字の名前が流行って、近年では「湊」「蓮」「樹」といった漢字一文字の名前が再び人気を集めている。また女の子の名前では、大正初期に「千代」「ハル」「キミ」といった二文字音の名前が流行り、昭和では全体を通して「和子」「陽子」「真由美」など「子」「美」といった止め字で終わる三文字音の名前が流行って、近年では再び「莉子」「凜」「杏」といった二文字音の名前が人気を集めている。かなの文字数について歯車効果が働き、交互に流行が起こっているといえる。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

しかし、名前が読めるか否かという点に関しては、Lieberson の提唱する歯車効果通りに、近年流行っている「読めない」名前の流行が終わり、数十年後には再びほとんどが「読める」名前になっているとは考えにくい。近年では「子どもの名前というのは、初めて見る人でも読めるものでなければならない」という価値観が薄れており、将来、読める名前/読めない名前の比率が変わる可能性はあっても、ほとんどすべての名前が読めていた時代に戻るといったことはないだろう。

「読める」名前から「読めない」名前への流行の変化は、不可逆的のものであり、単なる流行の移り変わりではない大きな変化だといえる。

2.5 なぜ読めなくなったのか、その原因について考えられてきたこと

親が子どもを名づけるとき、重視する点としては、漢字の意味、音の響き、字画による姓名判断の結果、初めて見た人に正しく読んでもらえることなどが挙げられる。もちろんその中での優先順位は人それぞれだろうが、初めて見た人に正しく読んでもらえるというのは、ある時代までは当然に満たすべき条件としてほとんどの親たちに共

通する認識だっただろう。それが、ある時点を境に漢字の意味や音の響きなど重視するようになった結果、正しく読めるという条件は劣後となった²⁶。個性的な名前をつけようとするれば、新たな漢字の組み合わせを創作しなければならないが、人名に使えると常識的に考えられる漢字は数が限られているうえ、おとも重視しようとするとなると、必然的に名前は読めないものになる確率が高くなる。あえて読めない名前をつけようとしているのではなく、漢字とおとについて別々にこだわって考えた結果、両者が上手く対応せずに、そのような流行が生まれているのだと考えられる。

しかし、「読めない」名前を質的に分析していくと、「読めない」名前が増えたことは、単なる流行によって起こった現象というだけでは説明できないとわかる。親の側の根本的な変化が新たな要素に影響しているのではないだろうか。次章では、親側の価値観の変化について考察していく。

²⁶ インスタグラム上で『四国新聞』「うちの王様」欄に子どもを載せた親数人にインタビューしたところ、子どもの名前が読めないことによる不便はそれほどないようだった。

3. 「見せる」ための名前

前章では、「読めない」名前を類型化し、流行という観点から分析してきた。しかし、「読めない」名前が増えた現象は、流行によってのみ説明できるものではなく、不可逆的な変化であるのではないだろうか。そこには、親側に決定的な変化があったと考えられる。その変化とは、すなわち名づけの条件の変化である。親が子どもに託したイメージと、子どもに反映させたい自らの物語性を、名前を通して他者に「見せる」ようになり、名づける際に視覚効果が重視されるようになったということを本章では検証する。

3.1 ポジティブな意味だけを切り取られた漢字

親側に起こった変化の一つに、名づけに使う漢字について、漢字のポジティブな意味だけを切り取って使うようになったことがあげられる。実際に私たちが収集した名前における漢字の意味のくみ取り方には、そうした特徴がある。「色春」と書いて「ひろは」と読む名前は、辞書読み基準でも慣習読み基準でも読めないが、単に読めない

という事実以上に我々の心に引っかかるのはこの二つの漢字の組み合わせであろう。「色」という漢字には、「いろどり」「おもむき」「仏教において、感覚でとらえることができる形あるすべてのもの」といった意味があり、単に「色」とだけ言われると色鉛筆や赤色、青色など英語の color の意味で使われる言葉を思い浮かべる人が多いだろう。また、「春」という漢字には、「三月から五月までを指す四季のひとつ」「正月」といった意味があり²⁷、単に「春」とだけ言われると立春や春夏秋冬など暦を表す意味で使われる言葉を思い浮かべる人が多いだろう。「一色」という名字や「春子」という女性の名前は実際に存在するし、それぞれの漢字が単独で使われる場合、それほどの違和感はない。しかし、「色」と「春」、それぞれの漢字に共通して「男女の間での情欲」という意味があり、「色恋」「色男」「売春」「春画」といった熟語でも、これらの漢字はそうした意味で用いられる。この二文字を合わせて使うと、「男女間の情欲」という、その意味が全面に押し出されてしまい、この名前を初めて見る人はその意味で受け取ってしまうだろうし、その意味を知っている人ならば名前には避

²⁷ 「漢字辞典オンライン」、(<https://kanji.jitenon.jp/> 最終閲覧：2020年2月14日)

ける漢字の組み合わせであろう。

しかし、名づけた親はおそらく「色」と「春」という漢字について先に述べた前向きな意味だけを考えて「色春」とつけたと考えられる。もし辞書などでこれらの漢字に情欲を表す意味があることを知ったとしても、漢字に複数の意味があるのは当然のことであり、無視できる範囲だと判断したのかもしれない。やや極端ではあるが、漢字の意味の一部だけが切り取られた例であるといえる。

また、2000年以降に名前に使われる漢字として「空」「夢」が人気を集めている。「空」という漢字を使った名前では、「蒼空」と書いて「そら」と読む男の子の名前や、「咲空」と書いて「さら」と読む女の子の名前があり、「夢」という漢字を使った名前では、「叶夢」と書いて「かなめ」と読む女の子の名前や「夢結」と書いて「ゆい」と読む女の子の名前、「夢叶」と書いて「ゆうと」と読む男の子の名前があった。「空」という漢字には、「青空」「大空」といった言葉で使われるように頭上に広がる空間という意味²⁸があるが、それ以外にもむなしい、無駄、からっぽ、いたずらなどの意味があり、仏教では本質

²⁸ 三省堂「三省堂ウェブディクショナリー」、(<https://www.sanseido.biz/> 最終閲覧：2020年2月14日)

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

や実体がないものという意味もある。必ずしも肯定的な意味だけで使われる漢字とは限らない。また「夢」という漢字には、眠っている時に見る、あたかも現実であるかのように錯覚する観念や心像や、将来実現したいと思っている事柄という意味があるが、心の迷い、はかないことなどの意味があり、「空」という漢字と同様に多義的で必ずしも肯定的な意味だけで使われるわけではない。

その一方で、赤ちゃん命名ガイドには、「空」という漢字の「願い」の欄には「大空に羽ばたくイメージから、世界で活躍してほしいと願って」とあり、「夢」という漢字の「願い」の欄には、「眠っているときに見る夢、希望などを意味することから、いつも希望や理想を持ち続ける人に成長することを祈って。また、将来、自分の夢を実現することが出来るようにという願いを込めて」とあった²⁹。明治安田生命の名前ランキングを見ても「空」「蒼空」など「空」という漢字を含む名前は2006年以降何度か上位にランクインしており、その人気の高さが窺える。どうして、このように漢字の意味の一部だけを切り取るようになったのだろうか。ポジティブな意味だけを切り取る背景には、「目に見える」イメージを重視する親たちの姿勢がみえてきた。

²⁹ 「赤ちゃん命名ガイド」、(<https://b-name.jp/> 最終閲覧：2020年2月14日)

3.2 視覚優位の情報

前節では、ポジティブなイメージが目に見えやすい漢字が名前に好まれるようになってきていることを説明した。かつての名前の条件にあった、おと、漢字の意味、字画による姓名判断に加えて、見る人の視覚情報にいかにか訴えられるかという要素が名づけに加わったのである。その要素が名づけにおいて重要視された結果、正しく読めるか否かという要素は後回しになり、名前は読めないものになってしまったのではないだろうか。「優心」「芯太」「叶夢」「宝来」「結愛」…。読めるか読めないかはともかく、親の子どもにつけた願いや名前から発せられるイメージが手に取るように伝わってくる名前が、私たちのデータに見受けられた。

我々は視覚からの情報に大きく頼りながら生活している。特に現代人の生活の利便性を飛躍的に高めたスマートフォンは、従来の折り畳み式携帯電話に比べ、大きな画面が特徴的であり、インターネット接続によって写真や動画を共有して楽しむことができる。世にあふれるコンテンツの中から人に見てもらうためには、他のコンテンツとの違いを一目見るだけで見る人にアピールしなければならない。

動画投稿サービス YouTube では、動画の顔ともいえるサムネイルに
いかにインパクトを持たせ、視聴者に動画をクリックさせて再生回
数を伸ばすかが肝心であり、アプリを開けば画面いっぱいに驚いた
り悲しんだりする人の表情と動画の内容を示す大きな文字が大々的
に現れる。いくら動画の内容自体が良質なものであっても、そもそも
興味を持ってもらえなければ見てもらえないからである。また、これ
はテレビにもいえることだが、ただ人がしゃべっているだけの動画
にも字幕がついていることはよくある。何分何秒に何の話をしてい
るかをすぐに理解してもらうことができ、また字幕を変えることで
話している内容をより効果的に視聴者に伝えることができるのであ
る。現代人は忙しい。短時間でいかに人の心をつかむかが重要な
のであり、そのためには人々の視覚情報に訴えるのが最も手軽な方法
なのである。

写真共有アプリである Instagram においても同様である。2017 年
の流行語には「インスタ映え」という言葉が新語・流行語大賞の年間
対象に選ばれ³⁰、見た目が美しい観光地やグルメ情報が話題となる中、

³⁰ 「流行語大賞は『インスタ映え』『忖度』 トップ10に『35億』『ひふみん』も」、『朝日新聞』、2017年12月2日、朝刊、第34面。

写真映えする食べ物を買って写真だけ撮り、少し食べただけで捨ててしまう行為も問題となった³¹。人は食事をするとき、食器や盛り付けなど視覚情報を楽しむことはもちろんだが、香りや味といった嗅覚や味覚による情報を主に楽しんでいるはずだ。もちろん他人がインスタグラムに投稿した料理の写真を見て、そこからにおいや味、その店の雰囲気想像するといった楽しみ方もあるだろうが、その場合でもやはり視覚情報を利用しているのである。人の心をつかみ注目を集めるには、視覚情報に訴えるのが効果的なのである。

名前が「読めなく」なり始めた 2000 年代初期にはスマートフォンは存在しないものの、インターネットの黎明期であり、あふれる情報の中から自分がたどりつきたい情報にいかにしてたどりつくか、自分のコンテンツを求める人にいかに見つけてもらうかが重要となった。真の内容ではなく、うわべだけが切り取られて出回ることもあった。また、2005 年の新語・流行語大賞トップテンには、「ブログ」と

³¹ 森西勇太、矢田幸己 「『インスタ映え』目的で大量食べ残し、法的責任は問えず?」、『産経新聞』、2019 年 9 月 20 日、電子版。

(<https://www.sankei.com/premium/news/190920/prm1909200005-n1.html> 最終閲覧：2020 年 2 月 14 日)

という言葉が選出され³²、翌年には「ミクシィ」が選ばれた³³。一般人でも、日記のように日々の出来事を記し、それを他者に見せることが可能になった。それまで芸能人が週刊誌で私生活を暴かれることはあっても、一般人のそれが可視化されることはなかった。しかし、ブログの登場で今まで他人に見られることがなかった私的な部分まで見られることを意識するようになったのである。内面を見せるようになった変化は、名づけにおいても現れ始めた。

3.3 「心」が流行る

前節で、それまで他者には見せない部分を見せるようになった社会の変化について述べたが、名づけの変化における顕著な例のひとつに、「心」という漢字が流行っていることが挙げられる。

明治安田生命の生まれ年別名前ランキングでは、2008年に「心優」という名前が7位に入っている。「心」という漢字が入った名前が上

³² 『『想定内』など流行語 『ユーキャン新語・流行語大賞』、『朝日新聞』、2005年12月2日、朝刊、第38面。

³³ 「流行語大賞は『イナバウアー』 『品格』も同時受賞」、『朝日新聞』、2006年12月2日、朝刊、第38面。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

位 10 位にランクインするのはこれが初めてである。その後は、2012 年に「心春」が 4 位に、「心愛」が 7 位に、「心咲」が 9 位にランクインしており、以降も 2019 年現在までに、毎年ではないものの、「心結」や「心春」という名前がランクインしており、その人気の高さが窺える。

表 3 明治安田生命の名前ランキングに入った「心」のつく名前³⁴

	ランキング	名前
2008年	7位	心優
2011年	5位	心愛
2012年	4位	心春
	7位	心愛
	9位	心咲
2014年	10位	心春
2015年	7位	心結
2019年	8位	心春

『四国新聞』「うちの王様」欄のデータを見てみると、2001 年に女の子の名前で「心」と書いて「こころ」と読む名前が登場し、2002 年にひらがなの「こころ」という名前の女の子が登場していた。さらに

³⁴ 表 3 は、明治安田生命の名前ランキング「生まれ年別ベスト 10」をもとに、著者が作成したものである。
(https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/girl.html 最終閲覧：2020 年 2 月 14 日)

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

2003年には、「建心」と書いて「けんしん」と読む男の子の名前が、2004年にはひらがなで「こころ」と読む名前の女の子が二人登場した。ここまでは、「心」という漢字を「こころ」または「しん」と読んでいるため、読める名前である。しかし、2005年にはすべて女の子の名前で「心愛」と書いて「ここな」、「心優」と書いて「みゆう」、「心愛」と書いて「みちか」と読む名前が登場し、いずれも辞書読みでは正しく読むことができない。2006年には、「雄心」と書いて「ゆうしん」と読む男の子の名前や、「心音」と書いて「ここね」と読む女の子の名前が、2007年にはいずれも女の子の名前で「心美」と書いて「みみ」と読む名前や、「心春」と書いて「ここは」と読む名前、「愛心」と書いて「まなみ」と読む名前が登場している。「心優」という名前が全国的な名前ランキングに入り、「心」という漢字が広く名前に使われるようになった2008年以降も「心」という漢字が入った名前は毎年継続して「うちの王様」で見ることができる。男の子の名前では、「優心」と書いて「こころ」、「絆心」と書いて「きずな」、「心太郎」と書いて「こたろう」と読む名前が、女の子の名前では、「心美」と書いて「ここみ」、「心愛」と書いて「ここあ」「のあ」、「心乃華」と書いて「このは」、「心桃」と書いて「こと」、「柚心」と書いて

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

て「ゆこ」、「心奏」と書いて「まなか」、「心暖」と書いて「こはる」と読む名前がある。男女ともに名前に使われる、人気のある漢字である。戸籍統一文字情報に登録されている「心」という漢字の読み方は、「こころ」「しん」だけであり、2004年までに登場する名前は素直にその読み方で読める名前であったが、2005年以降に登場する名前は、「心」という漢字を名のりである「み」と読んだり、一部だけを切り取って「ここ」「こ」と読んだり、「の」「まな」など完全に読めない読み方で読ませたり、そのほとんどがおそらく初見では正しく読めない名前である。

表4 『四国新聞』「うちの王様」欄のデータにある、「心」のつく名前³⁵

名前とその読み

2001年	心（こころ）
2002年	こころ
2003年	健心（けんしん）
2004年	こころ
2005年	心愛（ここな、みちか） 心優（みゆう）

³⁵ 表4は、1996年～2010年の各月1日の『四国新聞』の朝刊に掲載された「うちの王様」欄に載っている子どもの名前をもとに、著者が作成したものである。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

- 2006年 雄心（ゆうしん）
心音（ここね）
- 2007年 心美（みみ）
心春（こは）
愛心（まなみ）
- 2008年 優心（ゆうしん、こころ）
心美（ここみ）
- 2009年 雄心（ゆうしん）
絆心（きずな）
心結（みゆ）
- 2010年 柚心（ゆこ）
心愛（のあ、ここあ）
心春（こはる）
心桃（こと）
- 2011年 心奏（まなか）
心暖（こはる）
心太朗（こたろう）
維心（いしん）

同時期に流行った名前として、名前ランキング上位の「結愛」、「陽葵」などの女の子の名前も、正しく読むのが難しいうえ、読み方も複数考えられるが、「結子」、「愛」、「陽子」、「葵」などの名前があるように、それぞれの漢字自体は昭和の時代から名前によく使われてきたものである。「ユウ」、「アイ」、「ヨウ」、「アオイ」と読めるように、それぞれの辞書における読み方を考えても名前に使いやすい漢字であるといえる。しかし、「心」という漢字が名前に用いられ始めたの

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

は2000年以降のことであり、読み方に関しても特に名前に好ましい漢字というわけではない。そもそも「心」という漢字は辞書通りに読むと「こころ」「しん」としか読めず、ほかの漢字と組み合わせるなどして個性を出しつつ読める読み方で人名に用いようとする、かなり独特なおとの名前になるため、特殊な読み方で読ませるしかなくなる。しかし、わざわざ「心」という漢字を使おうとすることから、どうしてもその漢字を子どもの名前に使いたいという親の強い思いが感じられる。

では、なぜ「心」という漢字は、その読みの特殊性に反して名前に選ばれることの多い、人気の漢字となったのだろうか。ある漢字が名前に使われる漢字として人気を獲得する時、まず一部の人が使い始めて、それらが名づけ本やインターネット上の赤ちゃん命名辞典などに収録されて、名前に使う文字としてストックの一部となり一般に広まると考えられる。名前ランキングに登場したのは2008年であるため、一部の親が最初に「心」という漢字を使い始めたのが、2000年代前半だと考えられる。その背景に、「心」という漢字が人気を得た理由の一つとして、2000年前後にかけて起こった「こころ」ブームがあるのではないかと考えられる。精神分析学者の立木康介は、『露出せよ、と

現代文明は言う』の中で、次のように述べる。

心の傷について語らない（語らせない）文化から、語る（語らせる）文化へ。これはたんにメディア（だけ）の問題ではない。それに加えて、心について語ることへと人々を向かわせる社会的圧力のようなものの働き方が、どうやらこの数十年のあいだに変化してきたのである。「圧力」ということばの聞こえが悪いようなら、「オリエンテーション」とか「方向づけ」といいかえてもよい。現代に生きる私たちは、自分の心について語るように仕向けられ、促され、励まされている。おそらく、過剰なまでに。（中略） 私たちがこれまで注目してきた現象、すなわち、私的領域の公開や内面の露出といった現象は、いうまでもなく、このような心理学の大衆化と厳密にパラレルである。人々の「心の傷」にまでマス・メディアが立ち入って憚らない状況の背景には、通俗化した心理学的図式の一般的普及という事実がある。トラウマを乗り越えるためには、それについて語ること、話を聴いてもらうことが必要である、という理解に、いまや異を唱える人はいない。（中略） だが、個人の「心」について果てしなく紡がれてゆく夥しい語らいの渦のなかで、私たちの心はどれだけ豊かになったのだろうか。豊かになったのは、むしろ、告げられ、語られて、いわば可視化された「心のようなもの」の堆積ばかりではないだろうか。今日、人々が「心」を剥き出しにすることに腐心するあまり、これまで個人の「内面」とされてきたものが、外部に晒され、ときにはメディアによって増幅されて、私たちの耳目を刺激し続けている。「心の時代」というのは、そういう時代なのだ。「心」が外部に露出し、もはや「内面」を構成しなくなった時代。それゆえ、誰もが他者の「心」にじかに接触し、それをじかに侵すことができる時代。可視化された「心」に全面的に取り囲まれてしまう時代…³⁶。

³⁶ 立木康介『露出せよ、と現代文明はいう：「心」の闇の喪失と精神分析』、東京：河出書房新社、2013年、19-22頁。

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

「こころ」という言葉を辞書で引くと、①精神活動の総称、②思い、考え、③気持ち、④意味・内容、⑤おもむきといった意味が出てくる³⁷。立木は、「心」について具体的に定義しているわけではないが、心という、本来ならば目に見えないもの、とらえどころのないものが、見えるもの、手に取ることのできるものになり、メディアを通して他人に見せるような社会へと変化したと述べる。人々のどんな悲しみや苦しみの告白も、メディアを通して他のコンテンツと同様に消費されてしまうようになったのである。人の心や内面、またそれに付随する物語とは、必ずしも簡単に言葉にして人に伝えることができるものではないはずだ。しかし、人々は、心とそれにまつわるストーリーを「見せる」ことを重視するようになり、そうした価値観の変化が名前にも現れるようになったのではないだろうか。

1990年代は「失われた10年」と評されるように、社会的な不安が蔓延した。1980年代のバブル経済は崩壊した。社会面では、90年代半ばに阪神淡路大震災やオウム真理教による一連の事件が起こった。特にオウム真理教の事件では、教祖である麻原彰晃によるマインド

³⁷ 三省堂「三省堂ウェブディクショナリー」(<https://www.sanseido.biz/> 最終閲覧：2020年2月14日)

コントロールが注目された。医者や科学者であった教団幹部たちの「心」はいかにして支配されたのか、彼らの内面に世間の人々の関心が集まった。また同時期から、雑誌や新聞で「スピリチュアル」や「カウンセリング」という言葉が取り上げられるようになった。斎藤環は、『心理学化する社会』で、書籍や音楽、映画においてトラウマの物語がコンテンツとして大衆に受け入れられるようになったことを指摘する³⁸。

以上の研究では、トラウマなど心のネガティブなイメージをとりあげている。しかし、心が手軽にコンテンツとして消費されるようになった時代においては、ポジティブな意味においては、「心」がなお一層、外部に露出するようになったのではないだろうか。「心」という漢字の流行は、その顕著な例である。

以上のように、イメージや物語性を、目に見えるものとしてとらえ、それを外部に示すために、名づけにおいて、それに合うという条件のみを重視して、漢字を選ぶようになった。その結果、「読めない」名前が増えたのだと考えられる。

³⁸ 斎藤環『心理学化する社会：なぜトラウマと癒しが求められるのか』、東京：河出文庫、2003年、1-8頁。

おわりに

本研究において、四国新聞「うちの王様」欄に掲載された子どもたちの名前を収集し、独自の「読める」「読めない」かの基準に基づいて分析したところ、「読めない」名前は確かに増えているということがわかった。Liebersonによる名前の流行の研究を参照して考えると、その変化は突然変異であるといえるだろう。しかし、先行研究で話題になるような「突飛な」名前ばかりではなかった。分析の結果、「読めない」名前が増えた理由の一つは、おとは既存の体系に即しながらも、漢字の選択で個性を出す名づけが増えたことがわかった。また、その漢字を選択するときに、イメージや物語性、内面といった、本来ならば目に見えないとされてきたものを、視覚化することが重視されるようになったことも、「読めない」名前が増えた背景にあることがわかった。

本研究で対象としたデータは、香川県のみで発刊されている地域紙に掲載されている子どものデータであるため、積極的に我が子を他人に見せたがる親の子どもであるという点、主に香川県出身・在住の子どもに限られるという点でデータに偏りがあることは否定でき

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

ない。日本人の個人名のデータ量において最も豊富であると考えられる明治安田生命の調査でさえ、生まれた子どもの約 100 分の 1 のデータしか集めることができていない。個人情報保護の観点から、十分な個人名のデータを集めるのは難しい。

また、本研究は主に読めない名前について調査を進めてきたが、読める名前の中にも個性的な漢字やおとを取り入れた名前は多くあり、そちらについても研究の余地はある。「うちの王様」欄にも、女の子の名前で「明」と書いて「めい」と読む名前があった。確かに読めるが、かつては「明」と書けば「あきら」と読まれ男の子の名前と間違えられる可能性があることから、女の子の名前にその名前を付けるのは避けられただろう。読める名前の中にも、個性豊かなバリエーションが存在し、選択の幅が広がっている。また、男女の区別がつかない名前も増えている。女の子の名前で「珠羽」と書いて「しゅう」と読む名前や男の子の名前で「碧」と書いて「あおい」と読む名前など、性別を問わない名前もあった。男性、女性の型に当てはめることを必ずしもよしとしない最近の風潮を反映しているのかもしれない。

流行りの名前から読み取れるものはひとつではない。名前の流行は時代とともに変化し、数十年後には新たな名前のかたちが世に広

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

まっているだろう。名前の研究には無限の広がりがある。

参考資料一覧

[資料]

- 『四国新聞』 1997年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
1998年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
1999年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2000年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2001年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2002年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2003年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2004年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2005年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2006年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2007年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2008年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2009年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2010年各月1日朝刊掲載「うちの王様」
2011年各月1日朝刊掲載「うちの王様」

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

2012年各月1日朝刊掲載「うちの王様」

[参考文献]

- 伊東ひとみ (2015)『キラキラネームの大研究』（新潮新書）
- ウンサーシュッツ・ジャンカーラ
(2018)「資料として日本の名づけに関する広報誌を用いる可能性について」(『立正大学心理学研究報』第9号、立正大学心理学部)
- 久山健太 (2012)「Lieberson の個人名研究と日本における発展可能性」(『年報人間科学』、第33号、1-14頁、大阪大学人間科学部・人間学・人類研究室)
- 小林大祐 (2001)「名前の社会学的分析に向けて：漢字がつくる同一性のなかの差異」(『評論・社会科学』第65号、23-41頁、同志社大学人文学会)
- 小林康正 (2009)『名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク』（風響社）
- 斉藤環 (2003)『心理学化する社会：なぜトラウマと癒しが求められるのか』（河出文庫）

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

立木康介 (2013)『露出せよ、と現代文明はいう：「心」の闇の喪失と精神分析』（河出書房新社）

角田文衛 (2006)『日本の女性名：歴史的展望』（国書刊行会）

Lieberson, S. (2000), *A Matter of Taste: How Names, Fashions and Culture Change* (Yale University Press)

[その他]

「子の命名に見る“くらし”の喪失（投書欄）」

（『毎日新聞』、2007年8月20日、東京朝刊、第5面）

「世界で唯一の名：我が子は喜ぶ（投書欄）」

（『毎日新聞』、2007年10月1日、東京朝刊、第5面）

「『想定内』など流行語 『ユーキャン新語・流行語大賞』（『朝日新聞』、2005年12月2日、朝刊、第38面）

「なまえのはなし」

（『朝日新聞』、2020年1月1日、朝刊、第39面）

「流行語大賞は『インスタ映え』『付度』 トップ10に『35億』『ひふみん』も」（『朝日新聞』、2017年12月2日、朝刊、第34面）

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

明治安田生命「名前ランキング 2004」

(<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2004/best100/> 最終閲覧：2020年2月14日)

明治安田生命「名前ランキング 2019 調査要領」

(<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/result.html> 最終閲覧：2020年2月14日)

明治安田生命「名前ランキング 生まれ年別ベスト 10」

(https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/index.html 最終閲覧：2020年2月14日)

法務省「戸籍統一文字情報」

(<http://kosekimoji.moj.go.jp/kosekimojiddb/mjko/PeopleTop> 最終閲覧：2020年2月14日)

「漢字辞典オンライン」

(<https://kanji.jitenon.jp/> 最終閲覧：2020年2月14日)

三省堂「三省堂ウェブディクショナリー」

(<https://www.sanseido.biz/> 最終閲覧：2020年2月14日)

「赤ちゃん命名ガイド」

(<https://b-name.jp/> 最終閲覧：2020年2月14日)

「読めない」名前はなぜ増えたのか（香川美和）

森西勇太、矢田幸己「『インスタ映え』目的で大量食べ残し、法的責任は問えず？」（『産経新聞』、2019年9月20日、電子版

<https://www.sankei.com/premium/news/190920/prm1909200005-n1.html> 最終閲覧：2020年2月14日）

28267 字